

設立30周年記念

研究紀要

第25号

事業団の沿革

30年のあゆみ

縞条体圧痕文の付く野島式土器

金子直行

—早期後葉における縞条体圧痕文の付く細隆起線文土器の関係性について—

縄文前期中葉から後葉土器群の系統関係とその意味

細田勝

加曾利E式土器の終焉と称名寺式土器の関係

上野真由美

土偶研究とジェンダー考古学（1）

小野美代子

荒川流域出土の大席式土器について

栗岡潤

関東地方における古墳時代前期の木器と低地遺跡

福田聖

旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について

瀧瀬芳之

—埼玉県内出土象嵌遺物の研究（その2）—

国界地域の土器流通

赤熊浩一

—下総国と武藏国の様相—

地震で沈んだ倉と古代の集落

田中広明

2011

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 白井沼遺跡出土大麻式土器



2 大型壺口縁部（白井沼）



3 複合口縁壺（白井沼）



4 鋼冶屋・新田口遺跡（非掲載）



5 大型壺口縁部（川合遺跡）



6 大型壺口縁部（川合遺跡）



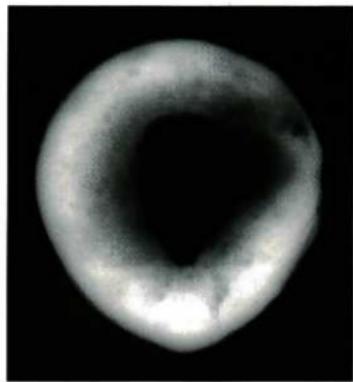
7 大型壺口縁部（川合遺跡）



8 大型壺口縁部（川合遺跡）

口絵2

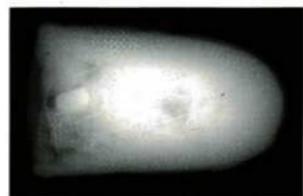
瀧瀨論文 X線透過写真



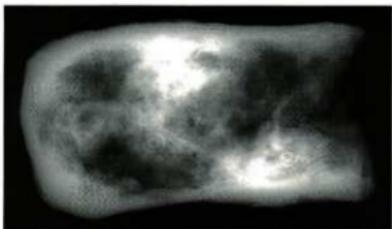
SPM88-041-12



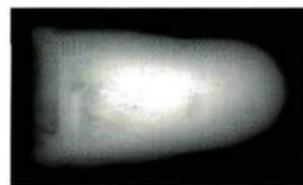
SPM88-041-16



SPM88-041-63



SPM88-041-64



旧埼玉県立博物館収蔵品の鉄刀と刀装具について —埼玉県内出土象嵌遺物の研究(その2)—

瀧瀬芳之

要旨 旧埼玉県立博物館に収蔵されていた鉄刀と刀装具の資料化を目指して、X線透過調査を実施した。その結果、児玉郡内古墳出土とされる鉄刀と刀装具のうち、4点の刀装具に象嵌が施文されていることが判明した。鉄刀の型式や象嵌文様などから、これらの資料にはおおむねTK209型式期(6世紀末)の年代が与えられる。また、今回発見された象嵌文様のうち、羽状文を対象として、同系統の鋸歯文と鱗状文を含めた編年作業を行い、8つの段階を設定して変遷過程を示した。

はじめに

埼玉県文化財収蔵施設には、「児玉郡内古墳出土」とされる古墳出土品が収蔵されている。これらは、旧埼玉県立博物館(現埼玉県立歴史と民俗の博物館・以下旧県博と記載する)が、県北在住の收集家から、平成元(1989)年3月に購入したものである。資料の内容は、鉄刀・刀装具・鉄鏡・馬具(轡・雲珠・杏葉など)で、旧県博の受入番号はSPM88-041-01~92である(埼玉県立博物館1992)。

馬具のうち一部は、関・宮代両氏によって紹介されている(関・宮代1987)ものの、その他の資料は、ほとんど公開されることなく現在に至っている。わずかに、昭和59(1984)年8月11日から10月7日まで、岩手・埼玉文化交流展として岩手県立博物館で開催された『北武藏 杖刀人とその時代』で、購入前の当該資料を含む出土品が、個人の收集品として展示された経験がある(埼玉県立博物館1984)。

本論は、これらの資料のうち、鉄刀と刀装具の資料化を行い、考古学的価値を明らかにすることを目指すものである。出土古墳や共伴関係に関するデータが欠如している資料ではあるが、だからといって、考古学的資料として研究の俎上にのせるための基本的な作業をおろそかにする理由にはならない。また、本資料に含まれる有窓鍔や円頭刀装具(柄頭・鞘尻)などの刀装具には、象嵌装

飾が施されている割合が高く(瀧瀬・野中1997)、X線透過調査を実施することによって新たな知見を得られる可能性もある。

また、あわせて、同じく旧県博の収蔵資料である鉄刀についても紹介する。受入番号SPM69-061の川越出土品、及びSPM69-261-03の出土地不明品である。これらは、旧県博の建設以前に同地にあった埼玉県立文化会館の収蔵資料で、昭和46(1971)年、旧県博の開館に伴い、引き継がれたものである(埼玉県立博物館1979)。

埼玉県立文化会館は、昭和23(1948)年に設立し、講演・講座・図書閲覧・展示会・刊行物の出版など、社会教育の各方面にわたるさまざまな活動を行い、戦後の県内文化活動の拠点となった施設である。昭和32(1957)年には、文化財保護の啓発普及を目的として付属の郷土館が開設され、生産文化財資料・民俗資料・考古資料など、郷土の文化財を広く収集展示していた(埼玉県教育委員会1977・埼玉県1991)。昭和37(1962)年11月に開催された「古墳とはにわ展」では、埴輪をはじめ大刀や装身具など合計200点以上が一堂に展出され、県内で初めての催しとして注目された(埼玉県立文化会館1963)。この2点の鉄刀は、このような経緯の中で、埼玉県立文化会館に寄贈もしくは収集された資料と考えられるが、残念ながら出處や来歴は明らかになっていない。

1 資料詳細

この章では、個々の資料の寸法を含む現状の状態について記載する。

(1) 児玉郡内古墳出土品

対象とするのは鉄刀8振り・鐔4点・縁金具2点・鏡2点・鷦目1点・円頭刀装具2点である。記述は旧県博の登録番号順とする。

SPM88-041-01 鉄刀（第1図1）

旧県博資料名称は「直刀」とあるが、鉄刀と記載する（以下同じ）。

平造り・両闘の鉄刀である。劣化のため刃の一部が剥落する。全長793mm（茎長98mm・刃長695mm）、刃幅30~22mm、背幅5~4mm、重さ450.5gである。闘は背闘がやや浅いが均等両闘の範囲内と考えられる。茎は茎尻に向けてやや幅を減ずる中細茎で、茎尻は栗尻である。目釘孔はない。

SPM88-041-03 鉄刀（第1図2）

平造り・片闘の鉄刀である。刃・背の一部と、切先の先端をわずかに欠く。現存長897mm（茎長161mm・刃現存長736mm）、刃幅35~28mm、背幅6~5mm、重さ717.1gである。刃闘は一部欠損しているため形状ははつきりしないが、やや曲線をして切れ込む撫角と推定される。茎は、闘からの切り込みが深く、茎尻に向けて幅がほとんど変化しない類直茎で、茎尻は直線状の一文字尻である。目釘孔は肉眼では明瞭ではないが、X線検査で3か所に確認された。均等に配されており、孔径は5~4mmである。同様に、径4mmの縁元孔が闘から3cmほど離れた位置に確認された。全体的に劣化が進み、剥落が著しいため、断面図は一部復元して示している。

SPM88-041-04 鉄刀（第1図3）

平造り・片闘の鉄刀である。茎尻を欠き、劣化による刃の剥落が著しい。現存長898mm（茎推定現長125mm・刃推定現存長773mm）、刃幅推定32~26mm、背幅6mm前後、重さ577.8gである。刃闘は欠損しているため形状は不明である（図では撫

角闘に復元）。茎は、闘から深く切れ込み、茎尻にかけて幅を狭める細茎と推定される。X線検査で径5mmの目釘孔が1か所に、径5mmの縁元孔が確認された。

SPM88-041-05 鉄刀（第1図4）

平造り・両闘の鉄刀である。刃の一部が剥落し、切先の先端をわずかに欠く。全長691mm（茎長90mm・刃長601mm）、刃幅27~24mm、背幅7~5mm、重さ450.5gである。闘は均等両闘である。背闘が浅い二段闘となっているが、これはおそらく縁が装着された痕跡とみなされる。茎は栗尻中細茎である。茎尻に近い部分に目釘が残っている。

SPM88-041-06 鉄刀（第1図5）

平造り・両闘の鉄刀である。刃と背の一部が剥落し、切先及び茎尻の先端をわずかに欠く。現存長622mm（茎現存長115mm・刃現存長407mm）、刃幅30~24mm、背幅9~6mm、重さ432.8gである。闘は均等両闘である。背闘が緩やかな二段闘となっているが、縁が装着された痕跡であろう。茎は中細茎であるが、茎尻が尖る特異な形状を呈している。目釘孔は存在しない。

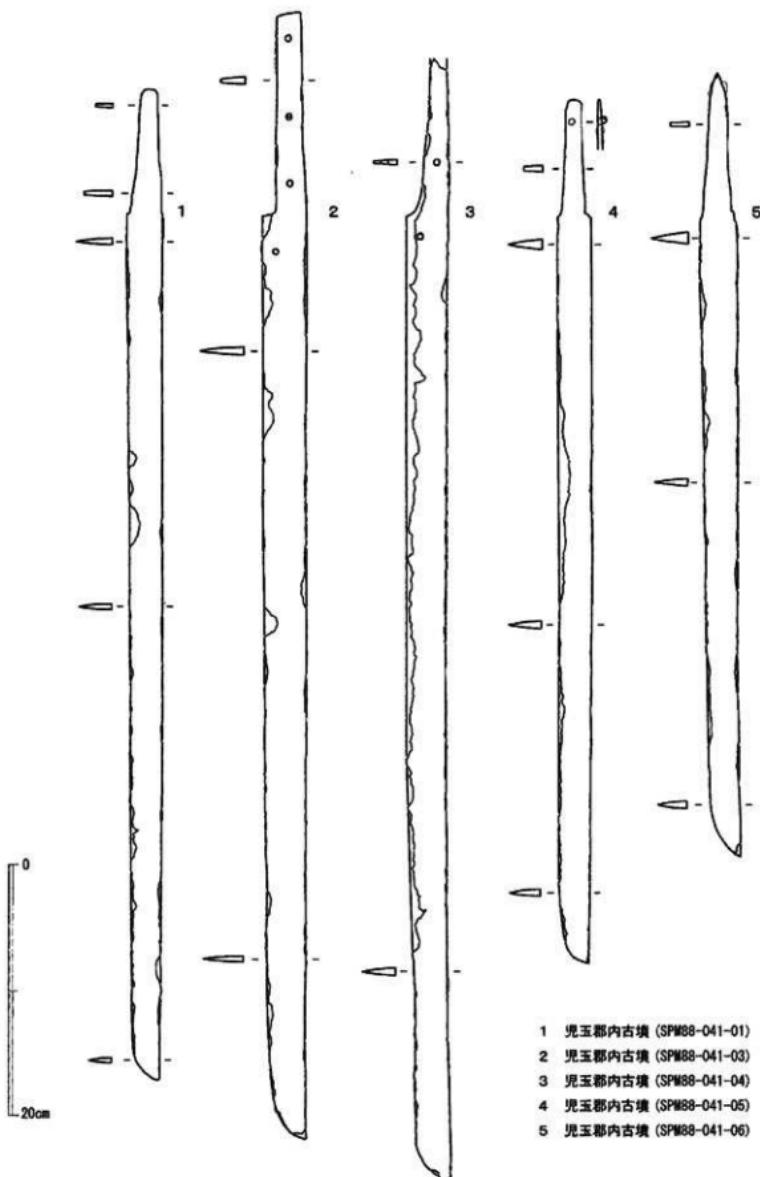
SPM88-041-07 鉄刀（第2図1）

平造り・両闘の鉄刀である。刃闘と茎の大半が失われ、刃と背の一部も剥落している。切先も剥落が著しく、形状は推定である。現存長641mm（茎現存長18mm・刃現存長623mm）、刃幅23~20mm、背幅5mm、重さ309gである。闘は均等両闘と推定される。

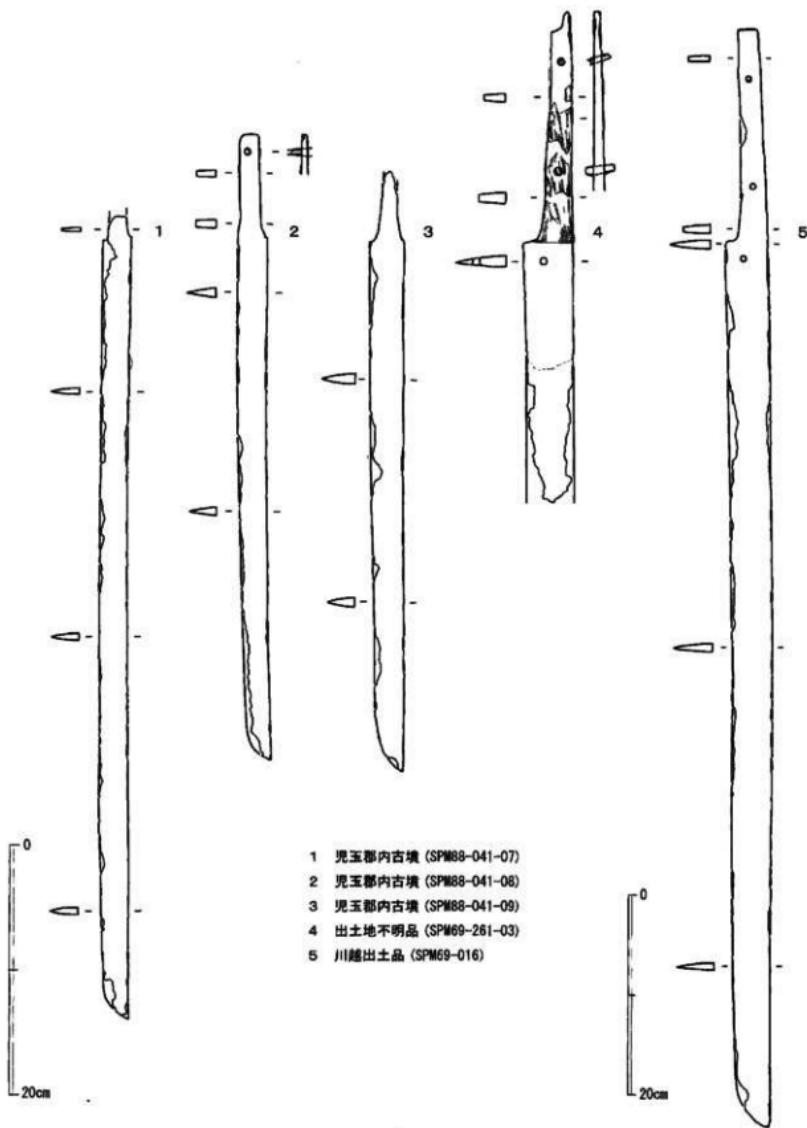
SPM88-041-08 鉄刀（第2図2）

平造り・両闘の鉄刀である。刃の一部が剥落し、切先にかけて大きく失われている。全長502mm（茎長82mm・刃長420mm）、刃幅24~20mm、背幅8~5mm、重さ253.9gである。刃闘は不明瞭で、なだらかに移行する。背闘には縁がはめこまれた痕跡がある。茎は一文字尻直茎である。茎尻に近い部分に目釘が残る。

SPM88-041-09 鉄刀（第2図3）



第1図 旧埼玉県立博物館収蔵鉄刀①(S=1/4)



第2図 旧埼玉県立博物館収蔵鉄刀②(1~4:S=1/4 5:S=1/5)

平造り・両闇の鉄刀である。茎は劣化が著しく、刃も一部が剥落している。現存長481mm（茎現存長55mm・刃現存長426mm）、刃幅28～23mm、背幅8～6mm、重さ320.5gである。闇は均等両闇である。茎は茎尻の幅をすばめた先細の細茎と推定される。目釘孔はない。

SPM88-041-10 鐸（第3図1）

鉄製の矩形八窓鐸である。大きさは長径87mm・短径76mm。茎孔径は推定で40×26mm、厚さ3～5mm、重さ64.3gである。茎孔を中心に大きく欠損しており、透かしのうち3か所の形状は推定である。有窓鐸には象嵌が施される可能性が高いが、本例には認められなかった。なお、本例は『北武藏 杖刀人とその時代』の図録番号（以下『図録』番号と記載する）79の写真上段中央の鐸と同一品である。

SPM88-041-11 鐸（第3図2）

鉄製の無窓鐸である。表面の一部は劣化し剥落している。大きさは長径68mm・短径56mm、茎孔径31×17mm、厚さは耳で4mm・茎孔で3mm、重さは54.6gである。象嵌はない。

SPM88-041-12 鐸（第3図3）

鉄製の無窓鐸である。1/4ほどが劣化し剥落しており、茎孔側の一部が欠落する。表面には、おそらく旧所有者によるものであろう研磨が施されている。大きさは長径65mm・短径57mm、茎孔径29×(17)mm、厚さは耳で5mm・茎孔で2mm、重さは46.4gである。本例では耳にのみ象嵌が確認された。象嵌の材質は不明であるが、おそらく銀と考えられる。

象嵌はC字状文か間隔を開けて施文されていることは判別できるが、欠落が多く、また耳部におけるX線の観察には限度があるため、その全容は明瞭でない。

SPM88-041-13 緑金具（第3図4）

旧県博資料名称は「資金具」とあるが、緑金具もしくはその大きさから柄頭の切羽と考えられる。

鉄製である。柄頭の切羽とすると、頭椎大刀か大形の円頭大刀に装着されていた可能性がある。大きさは長径63mm・短径49mm、孔径45×34mm、厚さ4～6mm、重さ31.2gである。象嵌はない。

SPM88-041-14 緑金具（第3図5）

旧県博資料名称は「資金具」とあるが、緑金具もしくは切羽と考えられる。鉄製である。大きさは長径53mm・短径41mm、孔径37×26mm、厚さ3mm、重さ13.3gである。象嵌はない。

SPM88-041-15 鐸（第3図6）

旧県博資料名称は「資金具」とあるが、鉄製の無窓鐸で、喰出鐸と考えられる。大きさは長径43mm・短径32mm、茎孔径23×15mm、厚さ4.5mm、重さ17.9gである。状態は良好で、一方の面には緑金具あるいは縄が接していた痕跡がある。象嵌はない。本例は『図録』番号79の写真下段右端の鐸と同一品である。

SPM88-041-16 鐸（第3図7）

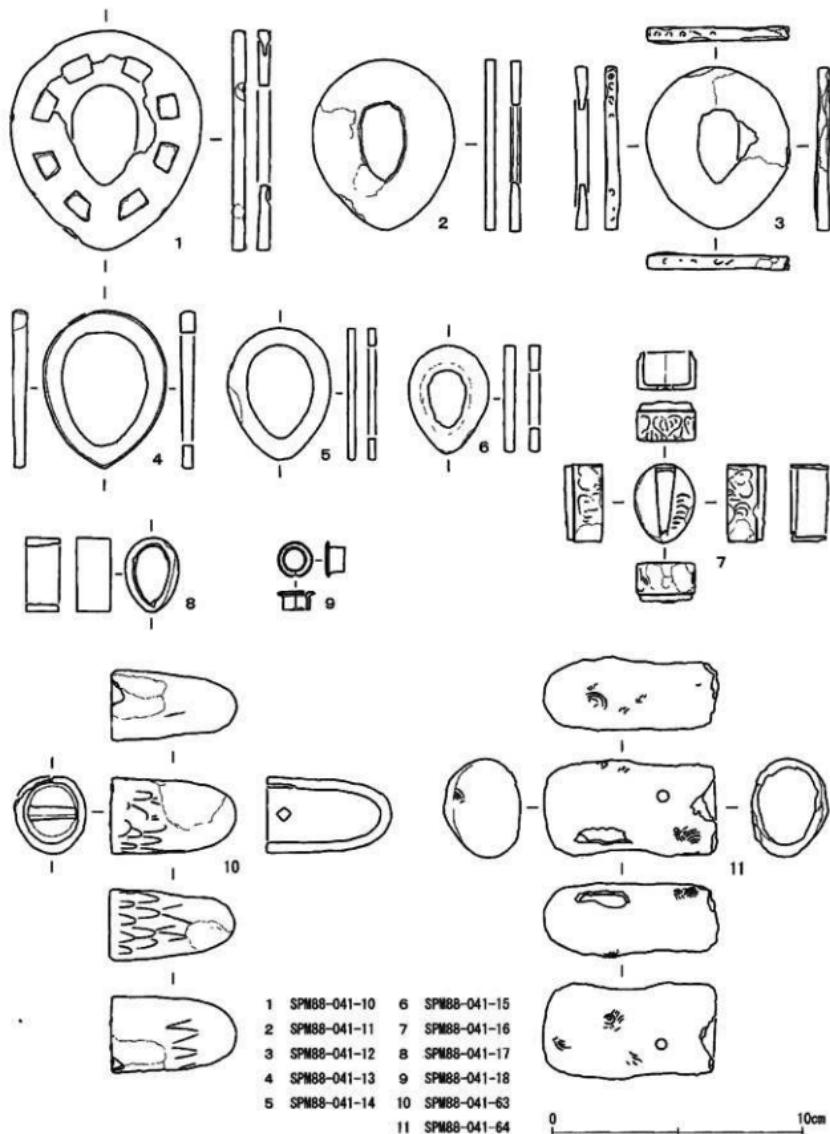
鉄製の鐸である。大きさは長径31mm・短径24mm、長さ15mm、厚さ1～2mm、重さ23gである。堰金を設けるタイプの鐸である。象嵌が施されているが、研磨されているためか、外側の象嵌はほとんど剥落しており、象嵌溝のみが肉眼で観察される。堰金の象嵌はかろうじて一部残っていることが確認された。

象嵌の文様はハート形のモチーフを連続させたもので、単位は6単位である。ハート形の内部と余白には旋状文を充填させている。堰金に残る象嵌は旋状文で、おそらく全面に施されていたものと推定される。なお、本例は『図録』番号79の写真下段右から2番目の鐸と同一品である。

SPM88-041-17 鐸（第3図8）

鉄製の鐸である。大きさは長径30mm・短径21mm、長さ13mm、厚さ3mm、重さ14.7gである。一枚板を巻いて刃側で鍛接した筒状の鐸である。象嵌はない。

SPM88-041-18 鶴目（第3図9）



第3図 旧埼玉県立博物館収蔵刀装具(児玉郡内古墳出土) (S=1/2)

金銅製の鷦鷯である。大きさは外径14mm・内径8mm、高さ7mm、厚さ1mm、重さ1.3gである。厚さ約1mmの銅板を筒状にまわして蝶付けし、一方の縁を叩いて広げている。鍍金は表面(可視範囲)にのみ施されている。

SPM88-041-63 円頭刀装具(第3図10)

鉄製の円頭状の刀装具である。長さ50mm、緑径30×28mm、厚さ3mm前後、重さ61.4gである。縁近くを断面方形の目釘が貫通する。X線透過調査の結果、連続する半梢円文と山形文を組み合わせた羽状文の象嵌が施されていることが確認された。羽状文の積み重ねは部分的に崩れているが、3段に配されている。図化はX線写真で確認された象嵌を、切り合いや表面の状態を考慮に入れて各面に割り付けて行った。そのため、その位置関係はかならずしも正確ではない。模式図と考えていただきたい。

旧県博資料名称では「柄頭」とされるが、鞘尻の可能性もあるため、円頭刀装具としておく。なお、本例は『図録』番号80の写真左から3番目と同一品である。

SPM88-041-64 柄頭(第3図11)

鉄製の柄頭である。端部の平面形は方頭に近いが、刃側に向けてしも下がりになるところから、円頭柄頭と考えてよいだろう。肉眼では確認できないが、径4mmほどの懸通孔がやや背寄りにあけられている。鷦鷯は存在していない。長さ69mm、緑径39×28mm、厚さ5mm前後、重さ80.1gである。本例にも象嵌が施されていることが判明したが、劣化が進み、表面の剥落も著しいため、象嵌はほとんど残存していないかった。材質はおそらく銀象嵌であろう。文様はわずかに残る二重円文と旋状文から、亀甲繋文と考えられる。象嵌の配置は、前例と同様に、X線写真から模式的に作図した。なお、本例は『図録』番号80の写真左から2番目と同一品である。また、本例と63の鞘尻は、かつて拙稿で紹介したことがある(瀧瀬1991第3図5)。

(2) 川越出土品

SPM69-016 鉄刀(第2図4)

平造り・片闊の鉄刀である。茎・刃・背の一部を欠く。全長1,200mm(茎長212mm・刃長988mm)、刃幅42~35mm、背幅9~6mm、重さ1,325gである。刃闊は曲線をなしてやや深く切れ込む撫角で、基は一字文字尻類直基である。径5mmの目釘孔が2か所均等に配置されている。鍍元孔は径5mmである。

(3) 出土地不明品

SPM69-261-03 鉄刀(第2図5)

平造り・片闊の鉄刀である。茎尻の一部と刃の大半を欠く。現存長392mm(茎長184mm・刃現存長208mm)、刃幅40~38mm、背幅9mm、重さ351.5gである。刃闊は深く弧を描いて切れ込み、茎胴部は細く、茎尻は隅を弧状にえぐり落とした隅抉尻である。径5mmの目釘孔が2か所均等に配置され、内部には扁平な平釘が残っている。鍍元孔は径6mmである。茎の表面には柄木の木質が付着しており、柄木がどこまで及んでいたか、その境が明瞭である。刀身側裏にはその境と接するように鞘木の木質が残っており、この刀が鐔や鍔などの金属製装具をもたない木装の持をもっていたことが分かる。なお、本資料の刀身と考えられる破片(SPM-261-01・02)も同時に保管されているが、剥落が著しく、原形をほとんどとどめていないため図化しなかった。

2 所見

本章では、各資料について、おもにその年代に閲て所見を述べる。

(1) 児玉郡内古墳出土品

鉄刀は白杵分類(白杵1984)を基準にまとめる以下のようになる。

01: 均等両闊栗尻中細茎

03: 撫角? 片闊一字文字尻類直基

04: 片闊細茎

- 05：均等両関栗尻中細茎
- 06：均等両関尖尻中細茎
- 07：均等両関？
- 08：均等？両関一文字尻直茎
- 09：均等両関細茎

06の茎尻は白杵氏の分類にない特殊なものであるため、新たな形制を設定した。2振りある片関の大刀のうち、03が該当すると思われる撫角片関一文字尻類直茎の鉄刀の年代は、古墳時代中期から後期にかけて、須恵器型式でいうとTK10～TK209型式期とされている。両関の鉄刀では、01・05が該当する均等両関栗尻中細茎の鉄刀が、TK209～TK217型式期に盛行したと考えられている。他の両関の鉄刀も、身幅が30mm前後と細身で、全長も500～700mmに収まるので、それと同様の年代観があてはまるのではないかと考えられる。

刀装具では、10のような矩形八窓鐔は、TK43～TK217型式期までみられるが、10は整った倒卵形の形状や、均等な配置の透かしなどから、後出のものではなきそうである。13の大形の柄頭縁金具は、鉄装あるいは木芯円頭大刀や頭椎大刀の一具である可能性が高い。したがって、その年代はTK209型式期が中心となろう。他の無窓鐔など、象嵌のない鉄製刀装具や金銅製鷲目は、帰属時期は、明確な根拠はないが、おおむねTK43～TK209型式期に収まるものと考えられる。

12は耳にのみ象嵌を施す無窓鐔である。その文様はおそらく単純にC字形の文様が連続する「C字状文」か、波状文を中心として交互にC字形の文様が連続する「波状C字状文」と考えられる。年代は、ともにTK209型式期の前半代に求められよう（瀧瀬・野中1996）。本例のように、耳にのみ象嵌を施した無窓鐔は、類例が少なく、管見では本例のほかに13の出土例があるにすぎない。埼玉県では桶川市西台3号墳（塙野・増田1970・註1）について2例目となる。

16のハート形文を施す鐔は、これまで全国で27

の類例があるが、県内では美里町広木大町9号墳から出土している（瀧瀬・野中1996）。広木大町9号墳例は、鐔と鐔の間にハート形文・耳に波状C字状文を施す象嵌装大刀で、時期は、耳の文様からTK209型式期でも前半期のものと考えられる。ハート形文のデザインは本例と酷似しており、ほぼ同様の年代が与えられよう。

63は羽状文を施す円頭刀装具であるが、その文様から鞘尻の可能性が高いと考えられる。本例を含めたこの系統の象嵌刀装具についての所見は、次章で詳述したい。

64のように亀甲繋文を施した象嵌柄頭は、管見では、全国で、円頭・頭椎・圭頭柄頭を含めて60の出土例を確認している。うち、県内での出土例は、円頭大刀が本庄市秋山古墳群（埼玉県1951/瀧瀬・野中1996）と神川町青柳古墳群南塚原支群72号墳（田村1996a）から、頭椎大刀が美里町塚本山137（県報告19）号墳（増田 他1977/瀧瀬・野中1996）から出土している。本例は4例目に当たるが、すべて児玉郡市内から発見されていることは興味深い。64は、その文様がほとんど残っていないため、比較検討するデータは乏しいが、かろうじて繩線が三重線で、支点が二重円文であることと、亀甲内に旋文が多用されていることがわかる。これは、橋本編年（橋本1993）の主として第三段階（秋山古墳群例を含む）から第四段階にかけての亀甲繋文にみられる特徴といえる。第三段階には6世紀末の年代が与えられている。

（2）川越出土品

白杵分類によると撫角片関一文字尻類直茎の鉄刀に該当し、TK10～TK209型式期という年代観が与えられている。

（3）出土地不明品

撫角片関隅抉尻細茎の鉄刀である。この形制の大刀の年代はMT15～TK209型式期にあたると考えられている（白杵1984）。

3 鋸齒文・鱗状文・羽状文を象嵌する円頭・方頭刀装具について

本章では、今回新たに確認された児玉郡内古墳出土の象嵌刀装具のうち、羽状文を施す円頭刀装具について考察していく。まず、県内をはじめ全国の類例を集成して分類・編年作業を行ない、本例の年代的位置づけを明らかにする。次に、これらの文様がもつ意味合いを再考し、象嵌文様の羽状文がどのように成立し、展開していくか、その過程を示したい。

(1) 概念規定

従来、象嵌の文様には、明確な概念規定がなされていないことが多い。そこで、今回改めて次のように規定する。

羽状文：①半円・半梢円文の連続もしくは積み重ね、②山形文の連続、③山形文・半円・半梢円文の頂点から延びる線（「頂線」と仮称する）で構成されるもの。①と②、①と③で構成される場合も含む。

羽状文を構成する要素のひとつとしてとらえら

れる①と②の文様は、単独でも施文されることが知られている。これらの文様は、互いに密接に関連しているものと考えられるため、次のように定めて、分析の対象に含むこととする。

鋸齒文：山形文が連続するもの。

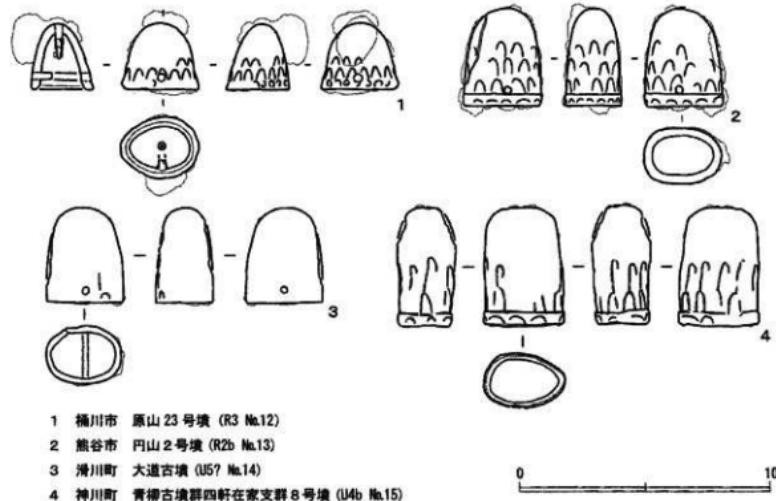
鱗状文：半円文・半梢円文が2段以上交互に積み重なるもの。

(2) 資料集成

現在までに鋸齒文・鱗状文・羽状文が施されている円頭・方頭刀装具は、管見では全国で47の出土例がある（第1表）。今後、保存処理に伴うX線透過調査が行われることにより、さらに出土例が増加していくことが見込まれる。

分布は、関東地方と畿内にやや集中する傾向にあるが、宮城県から福岡県まで、幅広く散在していることがわかる。

県内では、本例のほかに、桶川市原山23号墳（第4図1）、熊谷市円山2号墳（同図2）、滑川町大道古墳（同図3）、神川町青柳古墳群四軒在家支群8号墳（同図4）から出土している（註2）。



第4図 埼玉県内の類例 (S=1/2)

(No.)は第1表のNo.と同じ

第1表 鋸齒文・鱗状文・羽状文象嵌装具集成表

No	遺跡名 (所在)	遺構 (規模m)	形状	目釘	文様 (図No.)	出土状況	共伴象嵌装具付鉄刀・刀装具(文様)	文献
1	住社遺跡古墳周溝 (宮城県角田市)	古墳	円	横	U3b (5-11)	周溝出土		中村 他1991
2	白穴横穴墓群東1号横穴 (福島県いわき市)	横穴墓	円	横	R2a (6-20)	単独出土		高島・馬目2010
3	中田横穴 (福島県いわき市)	横穴墓	偏円	横	U3a	詳細不明	円頭刀装具(ハート形文)	いわき市1971/ 鈴木2004/ 森2004
4	郭内8号横穴墓 (福島県白河市)	横穴墓	偏円	横	U3a (5-9)	詳細不明	鍔(渦状文)付鉄刀	寺島 他1981/ 白河市歴史民俗資料館1983/ 鈴木2004/ 森2004
5	梶山古墳 (茨城県鉾田市)	円墳(40)	円	横	R2a (6-21)	石棺内で向きをそろえた10振りの大刀群の最上部寄せりから出土	円頭柄頭(亀甲繫文)/無意頭(耳:不明・平:ハート形文)・鍔(ハート形文)付鉄刀	汀 他1981/ 西山1986/ 関本1993
6	荒久台12号墳 (栃木県益子町)	円墳(22)	短円	横	R4 (6-25)	攤乱層出土	円頭刀装具(ハート形文)	益子町1987
7	井出二子山古墳 (群馬県高崎市)	前方後円墳(108)	方?	一	U1b (5-3)	トレンチ出土		若狭 他2009
8	山名原口II遺跡2号墳 (群馬県高崎市)	円墳(16)	円	横	U2a (5-5)	単独出土	八窓頭(耳:波状C字状文)	福田・神戸1991/ 高崎市觀音塚考古資料館2008
9	台所山古墳 (群馬県伊勢崎市)	円墳(30)	方	なし	K1 (5-1)	石棺内より一括出土	素面頭(縦取り線)大刀・柄頭筒金(亀甲繫花文)/一窓頭(波状文)/箱口(亀甲繫花文)	福島1925/ 東京国立博物館1983/ 町田1986
10	東小保方町出土 (群馬県伊勢崎市)	不明	円	横?	R2a	詳細不明	無意頭(不明)・鍔(不明)付鉄刀/無意頭(耳:不明・平:横線C字状文)	東京国立博物館1983/ 村岡・関・徳江1998
11	松本23号墳 (群馬県邑楽町)	円墳(12)	円	縱	U4a	象嵌装具付鉄刀の切先寄りから出土	柄録金具(半円文)・八窓頭(耳:交互重半円文・平:渦文)・鍔(渦文)付鉄刀	村岡1989/ 村岡・関・徳江1998
12	原山23号墳 (埼玉県桶川市)	円墳	短円	複合	R3 (4-1)	象嵌装大刀の柄頭	鍔(ハート形文)付鉄刀	塙野 他1978
13	円山2号墳 (埼玉県熊谷市)	円墳(18)	偏円	横	R2b (4-2)	詳細不明		埼玉県1982/ 若松1985
14	大道古墳 (埼玉県滑川町)	円墳(17)	偏円	横	U5? (4-3)	単独出土		木村 他1986/ 遊瀬・野中1996
15	青綿古墳群四軒在家 支群8号墳 (埼玉県神川町)	円墳(10)	円	なし	U4b (4-4)	単独出土		田村1996b
16	(埼玉県児玉郡)	古墳	偏円	横	U1c (3-10)			埼玉県立博物館1984
17	駿ノ塚古墳 (千葉県山武市)	方墳(60)	偏円	横	R3 (6-23)	刀装具は散在して出土	頭椎柄頭録金具(直半円+半円文)/有意頭(耳:对抗半円文・平:S字状文)/録金具(对抗半円文)	白石 他1996
18	多摩川台9号墳 (東京都大田区)	円墳(18)	偏円	縱	R3 (6-24)	象嵌のない装具付鉄刀に伴うとされる	八窓頭(耳:交互重半円文・平:渦文)・鍔付鉄刀	梅沢・白石・諸星1957/ 清水1995

No	遺跡名 (所在)	遺構 (規模m)	形状	目釘	文様 (図No.)	出土状況	共伴象嵌装具付鉄刀・刀装具(文様)	文献
19	二子塚古墳 (神奈川県秦野市)	前方後円 墳 (46)	円	なし ?	U2a	単独出土		秦野市板土手古墳展 示館2010
20	測訪駿横穴墓群 (神奈川県二宮町)	横穴墓						柏木2004
21	須曾郷東穴古墳 (石川県七尾市)	方墳 (21)	方	なし	R2b (6-22)	象嵌装円頭大刀の 一具 (鞘尻)	円頭柄頭 (亀甲繋文) /柄頭縁金具 (S字状 文) /八窓舞 (耳: 不 明・平: 圓繩内文) / 繩 (S字状文) /鞘口 (S字状文) /足金物2 (対抗重半円文) /資 金物2 (S字状文)	富田1992/富田 他 2001
22	茶臼山古墳群馬塚支 群1号墳 (福井県越前市)	円墳 (9)	円	縱	U4a (6-16)	鉄刀の切先近くか ら出土	縁金具 (半円文)	斎藤 他2001
23	湯谷1号墳 (長野県長野市)	円墳 (11)	円	横	U4a	詳細不明	主頭柄頭 (亀甲繋文)	矢口 他1981/長野県 史刊行会1988
24	御旗堂古墳 (長野県飯田市)	前方後円 墳 (65)	方	なし ?	U1b	不明	円頭柄頭 (亀甲繋文)	長野県史刊行会1983・ 1988/鶴谷2007
25	本郷大塚古墳 (長野県須坂市)	円墳 (16)	弧	縱	U4a (5-15)	鉄刀群より離れて 単独出土	柄縁金具 (半円文) · 八窓舞 (耳: 対抗半 円文・平: ハート形 文) ·繩 (円文) 付鉄刀	泉森 他1992
26	釜石古墳 (長野県茅野市)	円墳	円	不明	U3b?	繩付鉄刀の切先に 押入されて出土 (鞘尻)	無窓舞 (平: 滑文)	宮坂1967/長野県史 刊行会1988
27	宮之脇2号墳 (岐阜県可児市)	円墳	偏円	縱	U4a (5-13)	象嵌装具付鉄刀と の位置関係不明	柄頭縁金具 (半円文) /八窓舞 (耳: 刻目・ 平: 圓繩C字状文) · 繩 (圓繩C字状文) 付 鉄刀	中島 他1976/岐阜 県博物館1983/岩原 2006
28	四ツ池19号墳 (静岡県浜松市)	円墳	短円	なし	R4 (6-26)	単独出土		加藤 他1986
29	明ヶ島15号墳 (静岡県磐田市)	円墳 (19)	円	なし	R1b (6-19)	刀装具は散在して 出土	鞘口 (龍文) /柄頭縁 金具 (交互重半円文)	室内 他2003
30	駿馬炭焼古墳 (愛知県吉良町)	円墳 (8)	円	横	R2b?	象嵌装具付鉄刀の 切先近くから出土	柄縁金具 (半円文) · 無窓舞 (耳: 滑状文・ 平: ハート形文) ·繩 (ハート形文) 付鉄刀	三田2010
31	平田14号墳 (三重県津市)	方墳 (12)	円	横	U5 (6-18)	象嵌装木芯円頭大 刀の鞘尻	柄頭縁金具 (半円文) ·無窓舞 (耳: 半 円文・平: 滑状文) · 繩 (円文) 付木芯円頭 大刀	伊藤 他1987
32	丸尾山古墳 (三重県名張市)	円墳 (18)	方	なし	U1a (5-2)	単独出土		門田1999
33	猪崎29号墳 (滋賀県多賀町)	円墳 (13)	偏円	縱	U4b (6-17)	単独出土		本田 他2003
34	下山40号墳 (京都府福知山市)	円墳 (15)	円	なし ?	U4a?	詳細不明	八窓舞 (耳: 不明・ 平: ハート形文)	崎山1993・1994/農鳥 2001
35	高山12号墳 (京都府京丹後市)	円墳 (18)	偏円	縱	U3a (5-8)	詳細不明	縁金具 (重半円文)	増田 他1988 / 増田 1988
36	轟舟坂2号墳 (京都府京丹後市)	円墳 (17)	偏円	縱	U4a (5-14)	装具付鉄刀1振り の近くから出土		奥村・新納1983

No.	遺跡名 (所在)	遺構 (規模m)	形状	目釘	文様 (図No.)	出土状況	共伴象嵌装具付鉄 刀・刀装具(文様)	文献
37	長原七ノ坪古墳 (大阪府大阪市)	前方後円 墳(24)	方	無	K 1	詳細不明		高井1987/伊藤1988
38	出雲井5号墳 (大阪府東大阪市)	円墳(15)	円	不明	R 1 a	詳細不明		中西1998
39	幡籠古墳 (兵庫県豊岡市)	円墳(30)	偏円	横	U 3 b (5-10)	詳細不明		櫻本 他1976/西山 1986/兵庫県教育委 員会1988
40	沢の諸2号墳 (兵庫県舞鶴市)	円墳(9)	円	横	U 2 b (5-7)	詳細不明	頭椎柄頭縁金具(二段 半円文) / 八意鐸(耳: 交互重半円文・平: 渦文) / 線(渦文)付 鉄刀	市橋 他1987
41	奥山田遺跡 (和歌山县和歌山市)							尾崎2001
42	石州府5号墳 (鳥取県米子市)	円墳(32)	偏円	横	U 4 a	詳細不明	無意鐸(あり)	小原 他1989/米子市 1999
43	郊家平1号墳 (鳥取県倉吉市)	円墳(10)	円	複合	U 4 a?	象嵌装具付鉄刀の 切先側から離れて 出土	柄頭縁金具(C字状 文) / 柄縁金具(C字 状文)・無意鐸(耳: 交互重半円文・平: 渦文状)・線(C字状 文)付鉄刀	根 鈴 他1988/土 井 1994
44	柳谷古墳 (岡山県津山市)	円墳(7)	弧	横	U 3 b (5-12)	象嵌頭椎柄頭の近 くから単独出土	頭椎柄頭(亀甲繋文)	保田 他1988
45	平岩古墳 (岡山県赤磐市)	古墳	偏円	横	U 2 a (5-6)	擾乱層出土		二宮 他2006
46	浦江古墳群SO03 (福岡県福岡市)	円墳(21)	円	不明	R 2 a	単独出土		吉留 他2004
47	竹並D-18-3号横穴墓 (福岡県行橋市)	横穴墓	方	なし? ?	U 1 b (5-4)	単独出土		竹並遺跡調査会1979/ 横田1985/北九州大 立考古博物館1987

(3) 分類

まず、鋸歯文・鱗状文・羽状文を、それぞれ各資料に施されている構成パターンから、計17種に分類した。対象としたのは47例中45例である。ただし、縁に施されている半円文は、鱗状文には含めずに考えておく。各分類に該当する出土例は、第1表及び第5・6図を参照していただきたい。

【鋸歯文(K)】

1類：縁寄りに1段の鋸歯文が巡るもの。

【羽状文(U)】

1類：半円文もしくは鱗状文と鋸歯文で構成されるもの。半円文と鋸歯文をa類、鱗状文が2段の半円文のものをb類、鱗状文が半円文のものをc類とする(註3)。

2類：鱗状文もしくは半梢円文と鋸歯文及び頂線で構成されるもの。鱗状文のものをa類、半梢円文のものをb類とする。

3類：鱗状文と頂線で構成されるもの。鱗状文の段数が3段以上ものをa類、2段のものをb類とする。

4類：半梢円文と頂線で構成されるもの。頂線が直線のものをa類、曲線のものをb類とする。

5類：縁の半円文と頂線で構成されるもの。

【鱗状文(R)】

1類：半円文を積み重ねた鱗状文が施文されるもの。積み重ねか鱗状に整然としているものをa類、乱れているものをb類とする。

2類：半梢円文を積み重ねた鱗状文が施されるもの。梢円の幅が長さの2倍を超えないものをa類、2倍以上に長くなるものをb類とする。

3類：鱗状文が2段の半梢円文で構成されるもの。

4類：1列の半梢円文のみが施文されるもの。

次に、文様以外の分類要素として、装着方法と形状があげられる。

装着方法は、目釘を用いて固定するものが多い。それには次の3つの方法が認められる。

・横目釘留式：縁から横位に打ち込んだ目釘によって固定する。

・縦目釘留式：頂部から下に向けて打ち込んだ目釘によって固定する。

・複合目釘留式：横と縦両方の目釘が用いられているもの。

出土例の中には、目釘の認められない例もある。欠損したものでないならば、柄木もしくは梢木へはめ込むだけで固定したと考えざるを得ない。

形状は、佩表（佩裏）側からみた平面形の端部の形状を対象とするが、見た目による区別であるため、意的な判断が入り込むことは否めない。また、劣化による変形も影響を与えるので、あくまでも目安としてではあるが、次の5つに分けられそうである。

・方形：左右ほぼ均等の方形。

・円形：左右ほぼ均等の円形。

・偏円形：左右不均等の偏円形。

・弧状：斜めにカットした形。

・短円形：縁径と長さがほぼ同じで、縁から幅をせばめる寸詰まりのもの。

(4) 編年

象嵌文様は、まず元となるモチーフが存在し、そこに新しい要素が取り入れられて発展していく。統いて、単位を大きくして施文数を少なくするなど、なるべく手間をかけずに面積を埋めるようになる省力化が進み、文様が変化していくと考えら

れる。この仮定に基づくと、おおむね次のような過程をたどることができよう。

羽状文は、鋸齒文と半円文や鱗状文が組み合わされて成立し、頂線が加わって完成形となったと考えられる。その後、鋸齒文は失われ、鱗状文を構成する半円文が半梢円文へと変化し、施文数も少なくなっていく。一方、鱗状文は、細かい半円文が半单位ずれた規則正しい積み重ねから、規則性が崩れ、また半梢円文の積み重ねへと変化する。その後、羽状文と同様に、半梢円文は縦に長く施文されるようになり、単位も減少していく。

この過程を踏まえ、外形や装着方法の要素を加えて、次の8つの段階を設定した。

【第1段階】 K 1類

鋸齒文が施文される。形状は方形である。装着方法は縦目釘のものがみられる。

【第2段階】 U 1類

半円文や鱗状文と鋸齒文が組み合わせる羽状文の初期段階である。形状は方形である。

【第3段階】 R 1 a類

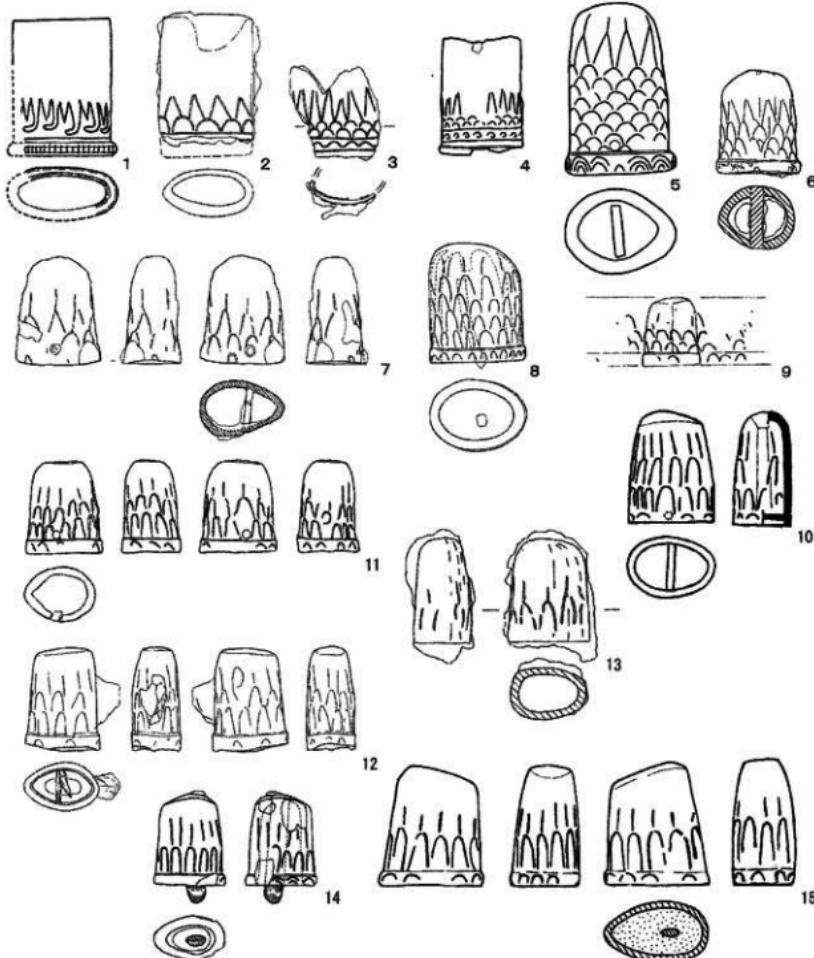
鱗状文が円頭刀器具に施文されるようになる段階である。形状は円形である。

【第4段階】 U 2 a類・R 1 b類・R 2 a類

羽状文が鱗状文+鋸齒文+頂線で構成される。第2段階の羽状文と比較すると鱗状文の段数に隔たりがあるため、3つの文様で構成される羽状文の成立は、第3段階に遡るかもしれない。鱗状文は、半円文の積み重ねが乱れはじめ、一方では、半梢円文へと変化していく。この半梢円文化は、羽状文を構成する鱗状文にもみられる傾向といえる。この段階で横目釘式のものが出現する。形状は円形が多いが、偏円形も認められる。

【第5段階】 U 3 a類・R 2 b類

羽状文の鋸齒文が半梢円形となり、鱗状文に吸収されていく。同時に鱗状文の半梢円文も長くなっている。施文単位は多く、ほぼ全面に施文される。形状は偏円形と方形がある。装着方法は横目

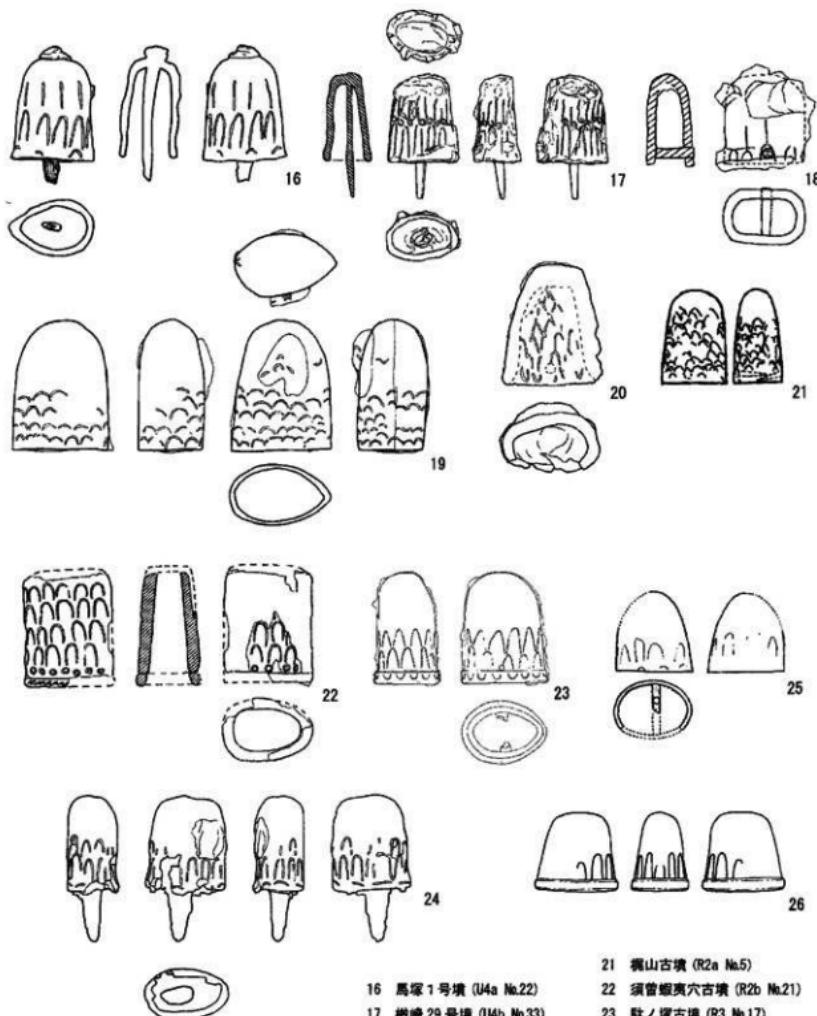


- 1 台所山古墳 (K1 No.9)
 2 丸尾山古墳 (U1a No.32)
 3 井出二子山古墳 (U1b No.7)
 4 竹並 D-18-3 号横穴墓 (U1b No.47)
 5 山名原口 II 留跡 2 号墳 (U2a No.8)
- 6 平岩古墳 (U2a No.45)
 7 沢の浦 2 号墳 (U2b No.40)
 8 高山 12 号墳 (U3a No.35)
 9 郡内 8 号横穴墓 (U3a No.4)
 10 鶴籠古墳 (U3b No.39)
- 11 住社遺跡 (U3b No.1)
 12 柳谷古墳 (U3b No.44)
 13 宮之脇 2 号墳 (U4a No.27)
 14 湯舟板 2 号墳 (U4a No.36)
 15 本郷大塚古墳 (U4a No.25)

0 10cm

第5図 象嵌刀装具の類例 (1) (S=1/2)

(No.)は第1表のNo.と同じ



- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 16 馬塚 1号墳 (U4a №.22) | 21 桐山古墳 (R2a №.5) |
| 17 横崎 29号墳 (U4b №.33) | 22 須曾蛭夷穴古墳 (R2b №.21) |
| 18 平田 14号墳 (U5 №.31) | 23 駿ノ塙古墳 (R3 №.17) |
| 19 明ヶ島 15号墳 (R1b №.29) | 24 多摩川合 9号墳 (R3 №.18) |
| 20 白穴東 1号横穴墓 (R2a №.2) | 25 荒久台 12号墳 (R4 №.6) |
| | 26 四ッ池 19号墳 (R4 №.28) |

0 10cm

第6図 象嵌刀装具の類例 (2) (S=1/2)

(№)は第1表の№と同じ

釘式が主流となるが、円頭刀装具に縦目釘式のものが出現する。

【第6段階】U 1 c類・U 2 b類・U 3 b類

羽状文の施文単位が縁を除いて3段になる。鋸歯文も一部にみられるが、この段階以降は消失する。鱗状文では出土例はないが、3段の半格円文で構成される鱗状文を想定できる。形状は円形・偏円形で、方形はこの段階での出土例はない。装着方法は横目釘式である。

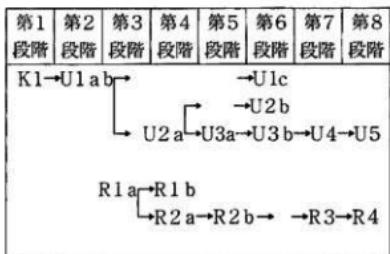
【第7段階】U 4類・R 3類

羽状文・鱗状文の施文単位が、縁を除いて2段になり、羽状文ではU 4 b類のように頂線が曲線化するものも散見される。形状は偏円形が多く、弧状や短円形のものも出現する。装着方法では縦目釘留式のものが増加する。この段階に属する出土例は45例中14例と最も多い。

【第8段階】U 5類・R 4類

羽状文・鱗状文の施文単位が、縁を除いて1段になる。羽状文では頂線のみが施され、縁の半円文などで羽状文が構成される。象嵌施文の最終段階と考えられる。形状は短円形で、装着方法は横目釘留式である。

以上示した段階ごとに、各類の変遷過程を表すと次のようになる。



(5) 年代観

第1段階のK 1類の台所山古墳例は、象嵌環頭大刀の稍尻と考えられるが、この環頭大刀はその構造や、鞘口に施された亀甲繋鳳凰文などから、「五世紀後半に百濟でつくられ、日本に移入され

た五世紀型環頭大刀にぞくする」とされている(町田1986)。また、同じくK 1類の方頭刀装具が出土した長原七ノ坪古墳からは、TK47・MT15型式の須恵器が共伴している(高井1987)。

第2段階に属するU 1 a類の丸尾山古墳からは、MT15～TK10型式の須恵器が出土している(門田1999)。また、U 1 b類を出土した井出二子山古墳の遺物の帰属時期は、TK23～MT15型式と考えられている(若狭他2009)。一方、同じくU 1 b類の出土をみた竹並D-18-3号横穴墓には、TK43型式期の須恵器が伴出している(竹並遺跡調査会1979)。

第3段階としたR 1 a類の出雲井5号墳からは、MT85～TK217型式の須恵器が出土している(中西1998)。

第4段階から第8段階に属する古墳や横穴墓から出土する須恵器は、TK209型式が中心となる。

以上のような須恵器の共伴関係などを参考に、各段階の年代観を設定すると次のようになる。

第1段階～TK47型式期

第2段階～MT15～TK10型式期

第3段階～TK43型式期

第4段階～第8段階～TK209型式期

(6) 考察

以上のように、鋸歯文・鱗状文・羽状文が施されている円頭・方頭刀装具の変遷を、8つの段階に整理した。今回紹介した児玉郡内古墳例(第3図10)は、羽状文U 1 c類に分類されるが、管見では同じ文様パターンに分類される出土例は見当たらない。施文が3段になることから、編年上は第6段階に位置づけ、年代はTK209型式期にあたると推定した。

この種の文様をもつ円頭刀装具を、筆者はかつて鞘尻の可能性が高いという見解を発表したことがある(瀧瀬・野中1996)。一部繰り返しになるが、今回改めてその点について触れておきたい。

穴沢・馬目両氏の鱗状文装饰の大刀に関する論

考では、日本列島から多く出土する单竜鳳環頭大刀に施される鱗状文は、柄頭から鞘尻に向かって積み重なっているもので、竜の鱗、鳳凰の羽毛を表すものと指摘されている（穴沢・馬目1979）。单竜鳳環頭大刀に続いて列島内で作成されるようになった、円頭大刀などの象嵌装大刀の文様に、その意匠が受け継がれていることは、柄頭に亀甲繫竜鳳文が施文されることからも明らかである。したがって、鱗状文、そして鱗状文で構成される羽状文もまた動物文であり、その施文の方向は鞘尻に向かって積み上げられると考えられる。羽状文の粗形となる鋸齒文のもつ意味は明らかではないが、鋸齒文や古式の羽状文が施される方頭刀装具が鞘尻であることはまず確実である。したがって、羽状文・鱗状文の施された円頭刀装具のうち、少なくとも第3段階から第4段階にかけてのものは、鞘尻である可能性が高いと判断してもよいのではないだろうか（註4）。

実際の出土状況をみてみると（第1表参照）、鞘尻である出土例（No26・31）や、その可能性の高い出土例（No11・21・30）がいくつか認められる一方で、確実な柄頭の例は、第7段階に位置づけたR3類の桶川市原山23号墳出土例（No12）のみである（註5）。

先に示した文様の変遷からも明らかなように、象嵌装大刀の製作の最盛期となるTK209型式期には、徐々に施文の単位が少くなり、形態化の一途をたどっていく。それは、もはやその本来の意味が失われてしまったことを意味するものであり、第5段階以降になると、鞘尻だけではなく柄頭にも鱗状文や羽状文が施されるようになっていくと考えられる。第7段階における出土例の増加は、こうした文様の「制約」が解放された結果と理解できるのかもしれない。

もうひとつ、金具の固定方法という観点からみてみよう。縦目釘留式は、本来方形の鞘尻（角尻）を固定するために用いられた技法であるため、円

頭刀装具がこの方法で固定されている場合、それは鞘尻（丸尻）である可能性は高いかもしれない。しかし、横目釘と縦目釘の両方で柄頭を固定している原山23号墳例をみても分かるように、この区別も絶対的なものではなく、縦目釘留式が普及していくなかで、円頭柄頭の固定にも用いられるようになっていくと考えられよう。

さらに形状の点からみると、形だけでは柄頭か鞘尻かの区別の判断は難しい。しかし、少なくとも短円形のものは、円頭柄頭として用いられている可能性が高いと思われる。

4 緒論

今回の旧県博の収蔵品を資料化する作業の過程で、10点の鉄製刀装具のうち4点から象嵌文様が確認された。これは、出土遺跡が未確定であることを差し引いても、価値ある発見といえよう。これらの刀装具を含む、児玉郡内古墳出土の一連の鉄刀や刀装具は、鉄刀の型式や象嵌文様の編年觀などから、6世紀末を中心とする年代に属するものと考えられる。

鋸齒文・羽状文・鱗状文を象嵌する刀装具について、その文様の分類から、8つの段階を設定しその変遷の過程を追った。本来は鞘尻に施される意味をもった文様が、量産化に伴い形態化していく、柄頭にも施されるようになることを指摘した。象嵌文様の施された円頭刀装具が、柄頭か鞘尻かどちらにあたるのかの判断は、文様の分析に加えて、出土状況・装着方法など、多角的な視点から考えなければならない。

本稿を草するにあたって、下記の方々にはたいへんお世話になりました。末筆ながら記して感謝の意を表します。

新井 端 大川 操 大谷宏治 尾崎 誠
門田了三 金子彰男 関根 訪 田村 誠
藤沼昌泰
(敬称略・五十音順)

なお、本稿は平成22年度研究助成の成果である。

- 註1 X線透過調査の結果、耳にC字状文の象嵌が発見された。
註2 筆者によるX線透過調査で明らかとなったものである。各関係機関のご厚意で掲載させていただいた。
註3 羽状文U1類は、共に施される文様の相違などから、さらなる細分化の余地がある。今後の資

料の増加に期待したい。

- 註4 鱗状文を、亀甲繋文の六角形の区画だけが残ったものという見解（高橋2002）もあるが、その変遷過程を示す出土例はなく、賛同できない。
註5 濑瀬・野中1996では、多摩川台9号墳の円頭刀装具を、内部に茎が残る例として柄頭と紹介したが、その後に増加した類例との比較から、内部の金具は継目釘の可能性が高いと考えられる。

引用・参考文献

- 穴沢啄光・馬目順一 1979『日本・朝鮮における鱗状紋装飾の大刀』『物質文化』33 pp1-25 物質文化研究会
泉森 岩他 1992『本郷大塚古墳』須坂市教育委員会
市橋重喜 他 1987『沢の浦古墳群』兵庫県文化財調査報告書第48集 兵庫県教育委員会
伊藤幸司 1988『遺物の健康診断 金属製品のレントゲン検査』『墓火』15号 p5 (財)大阪市文化財協会
伊藤英児 他 1987『平田古墳群』安濃町遺跡調査会
いわき市 1971『いわき市史』別巻 中田装飾横穴
岩原 剛 2006『飾大刀集成 美濃』『東海の馬具と飾大刀』pp157-159 東海古墳文化研究会
白井 熊 1984『古墳時代の鉄刀について』『日本古代文化研究』創刊号 pp49-70 古墳文化研究会
梅沢重昭・白石竹雄・諸星政得 1957『東京都大田区山根町布在原古墳群第四号・第九号墳発掘調査報告』『武蔵野』231-232合併号 pp24-43 武蔵野文化協会
奥村清一郎・新納 泉 1983『湯舟坂2号墳』久美浜町文化財調査報告第7集 久美浜町教育委員会
尾崎 誠 2001『保存処理を実施した象嵌資料』『元興寺文化財研究』No78 pp1-6 (財)元興寺文化財研究所
小原貴樹 他 1989『石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会・石州府古墳群調査団
柏木善治 2004『神奈川県内における古墳出土鉄製品の形態的検討一大刀・鉄鎌について』『研究紀要9 かながわの考古学』pp117-132 (財)かながわ考古学財團
加藤裕之 他 1986『四ッ池古墳群』(財)浜松市文化協会
門田了三 1999『横山古墳群』名張市遺跡調査会
北九州市立考古博物館 1987『北九州の横穴墓』展
岐阜県博物館 1983『岐阜県の考古遺物—発掘調査10年の出土品—』
木村俊彦 他 1986『寺前古墳群 大道古墳』滑川町文化財調査報告書第3集 滑川町教育委員会
埼玉県 1951『埼玉県史』第一巻 先史原史時代
埼玉県 1982『新編埼玉県史』資料編2 原始・古代 弥生・古墳
埼玉県 1991『新編埼玉県史』通史編7 現代
埼玉県教育委員会 1977『埼玉県教育史』第七巻
埼玉県立博物館 1979『埼玉県立博物館有資料目録I』(埼玉県立文化会館収蔵資料)
埼玉県立博物館 1984『岩手・埼玉文化交流展 北武藏 杖刀人とその時代』
埼玉県立博物館 1992『埼玉県立博物館有資料目録IX』(昭和62年～昭和63年)
埼玉県立文化会館 1963『埼玉文化月報』第128号
齋藤秀一 他 2001『茶臼山古墳群』武生市埋蔵文化財調査報告21 武生市教育委員会
崎山正人 1993『下山古墳群II』福知山市文化財調査報告書第22集 福知山市教育委員会
崎山正人 1994『下山古墳群III』福知山市文化財調査報告書第25集 福知山市教育委員会
塙野 博 他 1978『川田谷古墳群』桶川市文化財調査報告書第10集 桶川市教育委員会

- 塙野 博・増田逸朗 1970『西台遺跡の発掘調査』埼玉県遺跡調査会報告第5集 埼玉県遺跡調査会
- 静岡県 1992『静岡県史』資料編3 考古三
- 清水久男 1995『多摩川台古墳群9号墳出土の銀象嵌装大刀』『大田区立郷土博物館紀要』第5号 pp189-202 大田区立郷土博物館
- 渡谷恵美子編 2007『飯田における古墳の出現と展開－資料編一』飯田市教育委員会
- 白石太一郎 他 1996『千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』国立歴史民俗博物館研究報告第65集 東国における古墳の終末(附編) 国立歴史民俗博物館
- 白河市歴史民俗資料館 1983『新発見の考古資料 昭和47年度～57年度』
- 鈴木 勉2004『弘法山5号、中田、郭内8号各横穴墓から出土した象嵌遺物の復元』『福島県文化財センター白河館研究紀要』2003 pp58-64 福島県教育委員会
- 関 義則・宮代栄一 1987『県内出土の古墳時代の馬具』『埼玉県立博物館紀要』14 pp3-55 埼玉県立博物館
- 高井健司 1987『城下マンション(仮称)建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-23)略報』『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』pp149-185 大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会
- 高崎市觀音塚考古資料館 2008『光と力 繩文から觀音塚古墳まで』
- 高島好一・馬目順一 2010『神谷作106号墳・白穴横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告第141冊 いわき市教育委員会
- 高橋 満編 2002『弘法山のよこあな－古代ガラスと象嵌の世界－』福島県教育委員会
- 瀧瀬芳之 1991『埼玉県の斧付大刀』『研究紀要』第8号 pp101-126 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 瀧瀬芳之・野中 仁 1996『埼玉県内出土象嵌遺物の研究－埼玉県の象嵌装大刀－』『研究紀要』第12号 pp37-94 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 瀧瀬芳之・野中 仁 1997『象嵌遺物の保存処理』『考古資料保存研究会だより』No.1 pp2-6 考古資料保存研究会
- 竹並遺跡調査会 1979『竹並遺跡』東出版寧楽社
- 田村 誠 1996a『青柳古墳群の発掘調査から』神川町教育委員会
- 田村 誠 1996b『青柳古墳群四軒在家支群』神川町教育委員会文化財調査報告第13集 神川町教育委員会
- 寺島文隆 他 1981『郭内横穴墓群発掘調査報告Ⅰ』白河市埋蔵文化財調査報告書第4集 白河市教育委員会
- 土井珠美 1994『鳥取県郊家平古墳群の鉄器について』『文化財学論集』pp185-194 文化財学論集刊行会
- 東京国立博物館 1983『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇(関東II)
- 富田和気夫 1992『須曾蛭夷穴古墳』能登島町教育委員会
- 富田和気夫 他2001『史跡 須曾蛭夷穴古墳II－発掘調査報告書－』能登島町教育委員会
- 豊島直博 2001『古墳時代後期における直刀の生産と流通－近畿地方を中心に－』『考古学研究』第48巻第2号 pp82-100 考古学研究会
- 中島勝国 他 1976『宮之脇遺跡発掘調査報告書』岐阜県教育委員会
- 中西克宏 1998『出雲井遺跡第1次発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会
- 長野県史刊行会 1983『長野県史』考古資料編 全1巻(3)主要遺跡(南信)
- 長野県史刊行会 1988『長野県史』考古資料編 全1巻(4)遺構・遺物
- 中村方彦 他 1991『住社遺跡・荒町遺跡・寺前遺跡・田町裏遺跡』角田市文化財調査報告書第7集 角田市教育委員会
- 新納 泉 1982『単龍・単鳳環頭大刀の編年』『史林』第65巻第4号 pp110-141 史学研究会
- 西山要一 1986『古墳時代の象嵌一刀装具について－』『考古学雑誌』第72巻第1号 pp1-30 日本考古学会
- 二宮治夫 他 2006『来光寺跡・来光寺遺跡・立道遺跡・平岩古墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告199 岡山県教育委員会
- 根鉢輝雄 他 1988『郊家平古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第46集 倉吉市教育委員会

- 橋本博文 1993『龟甲繁鳳凰文象嵌大刀再考』『翔古論聚－久保哲三先生追悼論文集』 pp221-256 久保哲三先生追悼論文集刊行会
- 秦野市桜土手古墳展示館 2010『開館20周年記念特別展「発掘された秦野の古墳」』
- 樋本誠・他 1976『埴輪古墳・岩倉古墳群調査報告書』日高町文化財調査報告書第3集 日高町教育委員会
- 兵庫県教育委員会編 1988『きらびやかな黄泉の国 但馬の埋蔵文化財展図録』兵庫県立円山川公苑美術館
- 福島 市 1925『間の山古墳台所山とその発掘品』『上毛及上毛人』第102号 pp1-4 上毛郷土史研究会
- 福田敬一・神戸聖語 1991『山名原口II遺跡』高崎市文化財調査報告書第111集 高崎市教育委員会
- 本田 洋 他 2003『櫛崎古墳群』多賀町埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 多賀町教育委員会
- 益子町 1987『益子町史』第1巻 考古資料編
- 増田逸朗 他 1977『塙本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会
- 増田孝彦 1988『高山古墳群(12号墳)出土の象嵌をもつ刀装具』『京都府埋蔵文化財情報』第30号 pp38-40 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 増田孝彦 他 1988『京都府遺跡調査概報 第29冊 丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・63年度』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 町田 章 1986『環頭大刀二三事』『山陰考古学の諸問題』 pp277-300 山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 汀 安衛 他 1981『常陸梶山古墳』大洋村教育委員会
- 三田敦司 2010『古墳時代遺跡調査報告書』吉良町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 吉良町教育委員会
- 宮坂光昭 1967『長野県茅野市釜石古墳』『信濃』第III期第19卷第4号 pp62-74 信濃史学会
- 村岡泰子 1989『松本23号古墳発掘調査報告書』邑楽町教育委員会
- 村岡泰子・関 邦一・徳江秀夫 1998『邑楽町松本23号古墳出土の象嵌大刀』『研究紀要』15 pp35-58 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 室内美香 他 2003『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 二子塚古墳群・明ヶ島古墳群・土製模造品の調査』他 磐田市教育委員会
- 森 幸彦 2004『福島県内出土の象嵌資料』『福島県文化財センター白河館 研究紀要』2003 pp32-45 福島県教育委員会
- 矢口忠良 他 1981『湯谷古墳群 長礼山古墳群 駒沢新町遺跡』長野市の文化財第10集 長野市教育委員会
- 保田義治 他 1988『柳谷古墳』津市埋蔵文化財発掘調査報告第24集 津市市教育委員会
- 横田義章 1985『古墳時代の象嵌文様—九州の諸例紹介を中心に—』『九州歴史資料館研究論集』10 pp83-93 九州歴史資料館
- 吉留秀敏 他 2004『金武I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第792集 福岡県教育委員会
- 米子市 1999『新修米子市史』第7巻 資料編 考古 原始・古代・中世
- 若狭 敦 他 2009『史跡保渡田古墳群 井出二子山古墳 史跡整備事業報告書』高崎市文化財調査報告書第231集 高崎市教育委員会
- 若松良一 1985『比企地方の円筒埴輪』『第6回3県シンポジウム 塩輪の変遷—普遍性と地域性—』 pp29-41 北武古代文化研究会 他

図版出典

- 第1~4図 筆者実測・デジタルトレース(象嵌は4図4を除きX線写真を参考に作図)。
- 第5・6図 4は北九州市立考古博物館1987所載写真より作図。5は福田・神戸1991の実測図をもとに、高崎市觀音塚考古資料館2008所載の写真より作図。それ以外は各文献(第1表参照・複数ある場合はゴシックで表記)より転載(一部改変・省略したものもあるが、ご寛恕いただければ幸いである)。

設立30周年記念

研究紀要 第25号

2011

平成23年3月14日 印刷

平成23年3月24日 発行

発行 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台四丁目4番地1

<http://www.saimabun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 株式会社文化新聞社